



研究奨励事業  
研究報告

動機と時空という視座からみた清張推理小説の社会性

立命館大学 非常勤講師

和田 穎三

北九州市立  
松本清張記念館

動機と時空という視座からみた清張推理小説の社会性

立命館大学 非常勤講師

和田 棱三

## 目 次

はじめに

第一章 研究の枠組みと作業手順及び主題	二 動機の分類・形態・構造
一 研究の枠組み	松本清張が語る動機
参考文献と作品の舞台	作品に見る動機とその分類
研究の対象	動機の形態と構造
二 作業手順と主題の検討	(三)(二)(一) 動機の形態と構造
作品の時期区分と偏り	ア 隠蔽—犯罪型
研究対象の主題と類型化	イ 怨恨—嫉妬型
ア アリバイ・トリック型	ウ 排除—障害型
イ 人間関係重視型	エ 忿恨—仕打ち型
ウ 政治・経済事犯型	オ 成就—愛欲型
エ 心理描写洞察型	カ 強奪—金錢型
オ 負の過去抹殺型	
	1
8 7 7 7	6 6 6 5 4 3 3 2 2 2

第二章 殺人の動機に対する検討	二 動機の分類・形態・構造
一 殺害の方法と殺害の場所	松本清張が語る動機
(二)(一) 殺害の方法	作品に見る動機とその分類
殺害の場所	動機の形態と構造
	(三)(二)(一) 動機の形態と構造
第三章 清張推理小説の性格	ア 隠蔽—犯罪型
一 動機の文学	イ 怨恨—嫉妬型
二 社会の文学	ウ 排除—障害型
三 否定の文学	エ 忿恨—仕打ち型
四 予見の文学	オ 成就—愛欲型
五 紀行の文学	カ 強奪—金錢型
17	17 16 15 14 13 13
	12 12 11 11 11 11 10 10 9 9

結びにかえて

## はじめに

筆者は、本獎勵研究について、企画書には次のように記したことがあった。  
少し長くなるが、その一部を紹介してみたい。

『(略)ヒトがゴリラやチンパンジーと袂(たもと)を分かつ象徴的な出来事の一つが、犯罪や殺人であったのではないだろうか。犯罪や殺人という行為は、「人間とは、何か」、「人間の社会とは、一体どのようなものであるのか」という根源的な問いかけを内包している。松本清張は、推理小説家として、犯罪や殺人の動機に最も強い関心を示してきた人である。(略)松本清張が描く犯罪や殺人の背後にある動機は、おそらく戦前・戦後史や戦前・戦後の社会体制・社会事象の変容と深く関係してはいないだろうか。個々の推理小説にみられる犯罪や殺人の動機は、いくつかのタイプに分類することができるに違いない。動機は、時代とともに変容を遂げてきたのかも知れない。動機が、時代を語らせている可能性がある。(略)動機というものにも、おそらく構造というものがあるだろう。(略)動機のタイプに対する定量的な検討を加えることにより、松本清張という作家が抉(えぐ)り出そうとした社会性、その推理小説に描かれた社会性に対して、再び光をあてることができると考えている。推理小説のなかの犯罪や殺人は、松本清張が志向する「場」(空間)で繰り広げられた。(略)犯罪や殺人の「場」には、点から線へという脈絡のなかで検討が加えられるべきである。「場」に対する定量的な分析を加えることにより、松本清張という作家がみていた、彼の推理小説が描いた「場」に社会性という、彼のメッセージを見出すことができると考えている。(略)彼の社会性にかかる全体像を明らかにするには、動機と時空という視座から

定量分析を加えることがかなり有効であると判断される。(略)』

上記のように、筆者は研究対象・方法・目的の指向性を明らかにしたが、動機の時系列的な検討が予定していた時とは異なり、ひどく困難になってしまった。そこで、本稿では、松本清張の推理小説にかかる主題と性格の検討を付加することにより、その不足を補うこととした。

松本清張の作品は、推理小説、歴史小説、私小説、経済小説、政治小説、隨筆、自伝、古代史論究、現代史論究、ノンフィクション、取材メモ、対談、あとがき、というように多岐におよんでいる。それらのなかには、「小説帝銀事件」や「日本の黒い霧」などのようなノンフィクション、経済小説、政治小説であるにもかかわらず、推理小説の手法を採用している作品もあるので、その分類は容易なことではない。そうしたこと考慮しても、”清張作品の根幹をなすものは何か”といえば、推理小説とくに社会性を帯びた推理小説であると言いたい。筆者がここで松本清張の作品を社会派推理小説という時、必ずしも「深層海流」「日本の黒い霧」「現代官僚論」「小説帝銀事件」などの作品を指してのことではない。ありふれた日常生活をおくる普通の人々が、犯してしまいかねないような殺人、殺人に類する犯罪を扱った推理小説のことである。

しかし、『初期清張』作品(ここでは本格的な推理小説と判断される「顔」[昭和三一年八月]以前という区切りをつける)には、殺人や殺人の動機が詳しく描かれているわけではない、アリバイ工作、アリバイ崩し、トリック(技巧)が凝らされるということもなかった。「大臣の恋」(昭和二九年四月)、「恐喝者」(昭和二九年九月)、「赤いくじ」(昭和三〇年六月)、「青のある断層」(昭和三〇年一月)という『初期清張』作品は、犯罪の動機にそれほどの関心を示していなかった。また、作品もそれほど数多く発表されているわけで

はない。松本清張にとって推理小説はかなり遠い存在であり、松本清張という人がはじめから推理小説家を展望していたかと言えば、不確かである。

推理小説家としてデビュー作になつたといわれる「張込み」(昭和三〇年一二月)には、実は殺人そのものや殺人の動機がほとんど描かれていない。アリバイ工作、アリバイ崩し、トリックという点でも、特別な工夫が施されているわけではない。「張込み」は確かに名作ではあるが、それは人間に対する描写という点で、高い評価を得てきた。これを推理小説に加えるには、躊躇せざるをえない点があった。「顔」(昭和三一年八月)とそれに続く「点と線」(昭和三年一月～三三年一月)に対する世間の高い評価が、松本清張という人を推理小説家に押し上げたと言える。

ところで、松本清張の推理小説には、自殺という事象がしばしば登場する。他殺と比べても、その数はけっして少なくない。しかし、ここでは自殺とその動機については、主題としてほとんど取り扱うことしなかつた。自殺が、「二階」のように主題として欠くことができない要素を形成している場合は、あえて取上げることにした。自殺は、犯罪そのものでない。また、自殺が推理小説のなかで大きな比重を占め、読者に強い印象を与えた「ゼロの焦点」や「波の塔」を別にすれば、それほど多くはないだろう。

## 第一章 研究の枠組みと作業手順及び主題

### 一 研究の枠組み

#### (一) 参考文献と作品の舞台

松本清張の推理小説を検討する際、基本的な参考文献として志村有広・歴

史と文学の会共編『松本清張事典』(勉誠出版、一〇〇八)、岩見幸恵著、文献目録・諸資料等研究会編『松本清張書誌研究文献目録』(勉誠出版、二〇〇四)、「著書目録」(『松本清張全集第三八卷』所収、文藝春秋社、一九七四)、「年譜」(『松本清張全集第三八卷』所収、文藝春秋社、一九七四)、『松本清張全集第一卷』～『松本清張全集第六六卷』(文藝春秋社)、松本清張『隨筆黒い手帖』(中央公論社、一九六一)、松本清張『私のものの見方考え方』(大和出版、一九七八)、石川弘義「解説」(『松本清張全集第三九卷』所収、文藝春秋社、一九八二)を参考にした。松本清張『駅路』(文藝春秋社、一九六一)、松本清張『山峠の章』(光文社、一九六五)、松本清張『蒼い描点』(新潮社、一九七二)、松本清張『蒼ざめた礼服』(新潮社、一九七三)、松本清張『死の枝』(新潮社、一九七四)、松本清張『眼の氣流』(新潮社、一九七六)、松本清張『死の発送』(角川書店、一九八一)、松本清張『松本清張傑作総集I』(新潮社、一九九三)、松本清張『眼の氣流』(新潮社、一九九三)も読んでみた。世相の動きについては、神田文人・小林英夫編『戦後史年表一九四五～二〇〇五』(小学館、二〇〇五)と佐々木毅・鶴見俊輔・富永健一・中村政則・正村公宏・村上陽一郎編『戦後史大事典一九四五～二〇〇四増補新版』(三省堂、二〇〇五)を参考にした。特に『松本清張全集』(文藝春秋社)全六六巻は最も便利な文献であり、実に有益であった。研究時間の大半は、本書の再読と検討に充當した。『松本清張全集』は研究に不可欠な文献であるが、すべての作品が所収されているわけではない。その点では、若干の不便さを感じた。

その一方、作品の舞台となつたり、作品と関係する、小倉市／香椎海岸／和布刈神社／亀嵩駅／木津温泉／浦島神社／智恩寺・文殊堂／熱田神宮／ヤセの断崖／木崎湖／青木湖／大町山岳博物館／熱海市／天城峠／修善寺温泉

／下田市／東京駅／蒲田駅／田園調布／深大寺を訪れ、松本清張の郷土意識、特定地域に対する思い入れ、空間認識の一端を理解できるように努めた。

筆者には山登りの心得があるので、「遭難」の記事には以前から疑惑を抱いていた箇所があった。それが、今回、大町山岳博物館を再訪し、かつ地元の山岳関係者から聞き取り調査することにより、疑惑はほぼ解消された。

## (二) 研究の対象

研究の対象とする推理小説は、原則として、

a：戦後の日本や日本人を描いている

b：推理小説としての展開すなわちトリック、アリバイ工作、アリバイ崩し、謎解きが作品に認められる

c：犯罪や反社会的行為を含め、殺人を主題のひとつとしている

d：小説の舞台が主に日本であること

という四点に限定したい。

その最大の理由は、作品数が余りにも多いので、作品を検討し解明するための時間確保が困難ということである。推理小説の舞台が海外である作品は、すでに発表された、日本を舞台とする作品と類似する作品がある。作品名はときに変更されたことがあったが、最終的な作品名をもって掲載するようにした。例えば、「高校殺人事件」の原題名は「赤い月」、「天城越え」の原題名は「天城こえ」、「犯罪の回送」の原題名は「対曲線」などである。

## 二 作業手順と主題の検討

なお、殺人を主題のひとつにしていながらも、動機、アリバイ作り、アリバイ崩し、トリック(技巧)という点で、やや不満が残る作品は除外せざるを得なかつた。「お手玉」(昭和五三年八月)や「記念に」(昭和五三年十月)が、それである。松本清張の代表的な作品のひとつであると言われる「溺れ谷」

(昭和三九年一月～四〇年一月)・「黒い樹海」(昭和三年一〇月～三五年六月)・「黒地の絵」(昭和三年三～四月)、「棲息分布」(昭和四年一月～四一年一月)、「百円硬貨」(昭和五三年七月)についても、その対象には加えなかつた。また、「黄色い風土」(昭和三四四年五月～三五年八月)と「殺人行おくのはそ道」(昭和三九年七月～四〇年八月)は、時間的な制約があつて、講読することができなかつた。作品の入手が困難であった「獄衣のない女囚」(昭和三八年七月～一〇月)や「失踪の果て」(昭和三四四年五月)は、検討することができなかつた。「黒革の手帖」(昭和五三年一一月～五五年一月)は、殺人の有無ばかりでなく、アリバイやトリックの点でも、推理小説らしくないという印象を受けた。評判の作品ではあるが、結局、検討作品に加えなかつた。

一方、殺人が伴わないか殺人が未遂であつたり、殺人が推定の域を越えない、というような作品であつても、検討の対象に加えることにした。前者の例としては「共犯者」「寒流」「落差」、後者の例としては「眼の氣流」「屈折回路」「入江の記憶」「家紋」「田舎教師」「表象詩人」である。戦前の日本人を描いている「黒い血の女」「証言の森」「歯止め」は主題が面白いので、取上げることにした。「階」は他殺ではなく、自殺であつたが、取上げた。印象に強く残つた、あるいは印象に残らなかつたという、筆者の個人的な嗜好が加味されたことを断つておきたい。

### (一) 作品の時期区分と偏り

上記のような条件であれば、研究対象・方法・目的の指向性から逸れることはないと思う。そのような条件において、おおよそ該当する推理小説は、

一三九作品にのぼる。それらは、初出ということを基準にしながら時系列に並べ、推理小説特有のアリバイ作り、アリバイ崩し、トリック(技巧)の有無、動機の内容について、【第一表】(二〇頁)に整理した。作品の主題はきわめて重要であるので、主題を念頭におきながら、殺害の方法、殺害の場所も整理した。これらの資料に対して、定量的な検討を試みることにした。

一三九作品の推理小説は、昭和三〇(一九五五)年から平成二(一九九〇)年ころまでに書かれた作品である。著作の期間は、約三五年間におよぶ。これらの作品は、時間的に七つの時期に区分して検討しようとした。

- I期：昭和三五(一九六〇)年まで
- II期：昭和三六～四〇(一九六一～六五)年
- III期：昭和四一～四五(一九六六～七〇)年
- IV期：昭和四六～五〇(一九七一～七五)年
- V期：昭和五一～五五(一九七六～八〇)年
- VI期：昭和五六～六〇(一九八一～八五)年
- VII期：昭和六一～九八六)年以降

というごとくである。

ところが、作品数には、あまりの偏りのあることがわかつてきた。ちなみにI期(四四)、II期(三一)、III期(三六)、IV期(一七)、V期(四)、VI期(三)、VII期(四)である。I期からIV期までとV期からVII期までとでは、一二八点と一一点というように、発表作品の量に決定的な違いがあった。

松本清張の推理小説は、昭和三一年後半から昭和四八年半までの約一七年間に集中している。とくに昭和四九年以降、作品数は急減することになる。松本清張の推理小説は、彼が四七歳から六四歳までの間、凄まじい勢いで書かれた。特に昭和三六年には一五点以上、昭和四二年には一八点以上の作品

が、書かれている。松本清張は、まこと尋常な作家ではない。松本清張が、戦後の昭和を代表する作家であると言われる所以は、ここにある。従って、作品と時代との関係は、昭和三一年後半から昭和四八年までの一七年間を一括して捉えることができる。また、I期からVII期と、当初考えていた時期区分は、ほとんどその意義を失ってしまった。本稿では、時期区分に拘ることはせず、検討を加えたい。

## (二) 研究対象の主題と類型化

上記のような条件であれば、研究対象・方法 松本清張の作品は、総じて「暗い」「重苦しい」と言える。松本清張の作品に触れて、「元気になつた」という人はほとんどいないだろう。それは、松本清張が歩んだ人生と無縁ではないからである。あえて不遇と評しても差し障りがないくらい、辛い幼・少・青年期を過ごした。彼は、或る取材に「儂の希望だった。僕を夢中にさせたのは生活からの逃避だった。小説を書いている間は、いやな現実も逃げてくれたからね」(昭和二十五年)、と応えている。清張の作品は、松本清張が歩んだ人生そのものである。作品は、彼の分身と言える。それゆえ、松本清張の作品は、異彩を放つのではないだろうか。多くの読者が彼の作品の虜になってしまう理由は、ここにある。清張の作品は、常に魔性が潜んでいるかのようである。松本清張の人生は、推理小説の涵養源であったと言える。

歴史小説、経済小説、政治小説を含め、松本清張の推理小説には、社会の暗部・恥部や人間の虚飾・欺瞞を描いたものが少なくない。それらの作品には、巨悪ばかりでなく、小悪をも眠らせないという、強い決意が感じられる。厖大な作品群は、いくつものジャンルに分かれており、多様な世界を描いている。それらの世界はおおよそ次のように仕分けすることができる。

銀行・金融業界：「眼の壁」「彩り河」「彩霧」「黒革の手帖」

製糖業界：「溺れ谷」「中央流沙」

弱電機器業界：「二重葉脈」

政／官／財の悪の社会構造：「点と線」「深層海流」「ある小官僚の抹殺」「山峡の章」「けものみち」「迷走地図」「棲息分布」「中央流沙」

税務署関係：「歪んだ複写」

私立大学の世界：「混声の森」

教科書出版業界：「葦の浮舟」「落差」

マスコミ業界：「疑惑」「葦の浮舟」「時間の習俗」「渦」

法曹界：「霧の旗」「一年半待て」「種族同盟」「波の塔」

戦前・戦後の政治とその処理：「高校殺人事件」「球形の荒野」「Dの複合」

「証言の森」「蒼ざめた礼服」

警察捜査の盲点：「日光中宮祠事件」「渡された場面」「草の陰刻」

生命保険関係：「巻頭句の女」「留守宅の事件」

学歴偏重の保守的権威社会：「陸行水行」「地の骨」「真贋の森」

製薬関係：「風紋」「屈折回路」

宗教界：「黒い福音」「スチュワーデス殺し事件」「神の里事件」「家紋」

医療世界：「わるいやつら」「葦」「喪失の儀礼」

保守的で閉鎖的なアカデミズムの世界や古い権威を批判した作品（「菊枕」「断碑」「石の骨」）も少なくない。松本清張が社会派推理小説家と言われる所以は、ここにある。しかし、それすべてが、殺人がからむ犯罪を描いた推理小説ではない。また、ひとつの主題に絞り込むことが、困難な作品も少なくない。その例としては、「点と線」「波の塔」「Dの複合」「砂の器」「霧の旗」「速力の告発」「梅雨と西洋風呂」「渡された場面」「疑惑」「渦」「黒い方紙を買う女」「一年半待て」「鬼畜」「捜査圈外の条件」「ある小官僚の抹殺」「ゼロの焦点」「日光中宮祠事件」「天城越え」「凶器」「球形の荒野」「濁った

空」などの作品をあげることができる。

研究の対象となつた推理小説の主題について検討し、私的な視点でもつて整理をしてみた【第二表】（四頁）。作品はあまりにも多岐におよんでいるので、いくつかのタイプに分けることは、かなり困難であった。作品の分け方は、内容と手法の両面にまたがっているので、必ずしも統一的な分類基準でないことを断つておきたい。しかし、明瞭な特徴をもつ作品も少くないので、いくつかのタイプにあえて分けてみた。その数は、延べ一八六点になった。以下の通りである。

#### ア アリバイ・トリック型(八五)

アリバイ・トリック型は、アリバイ工作／アリバイ崩しとトリックに特化しており、最も推理小説らしい作品と言える。正統派の推理小説である。作品数は最も多く、八五(六)%を数える。

陽」「砂の器」「部分」「誤差」「確証」「鉢植えを買う女」「小さな旅館」「ガラスの城」「蒼ざめた礼服」「歯止め」「家紋」「交通事故死亡」一名」「土偶」「遠い接近」「微笑の儀式」「二つの声」「弱気の虫」「表象詩人」「夜光の階段」「犯罪の回送」「指」「黒い空」「山峡の湯村」「熱い空気」「証言」「古本」「典雅な姉弟」「薄化粧の男」「山峡の章」

「ある小官僚の抹殺」「眼の壁」「彩り河」「彩霧」「中央流沙」「重葉脈」「迷走地図」「点と線」「けものみち」「波の塔」「影の地帯」「金んだ複写」「球形の荒野」「草」「蒼ざめた礼服」「不安な演奏」「草の陰刻」「屈折回路」「数の風景」「高校殺人事件」「落差」「告訴せず」「山峡の章」

## エ 心理描写洞察型(一二)

人間関係重視型は、個人、家庭(家族)、社会で起こっている様々な問題が、殺人事件という形で取上げられている。作品数は多く、三九(二八%)を数える。

心理描写洞察型は、殺人事件そのものよりも、人間の描写という点で、興味や関心を惹かれる。人間関係重視型と心理描写洞察型は、松本清張が歩んだ人生の影の部分のようである。

「張込み」「天城越え」「潜在光景」「入江の記憶」「恩誼の紐」「部分」「霧の旗」「二階」「種族同盟」「波の塔」「山峡の章」「蒼い描点」

「鬼畜」「二階」「証言」「黒い血の女」「紐」「部分」「確証」「典雅な姉弟」「事故」「たづたづし」「新開地の事件」「証明」「二冊の同じ本」「表象詩人」「東経一三九度線」「山の骨」「山峡の湯村」「駅路」「疑惑」「白い闇」「一年半待て」「捜査圈外の条件」「波の塔」「小さな旅館」「ガラスの城」「花実のない森」「断線」「額と歯」「二つの声」「水の肌」「巨人の磯」「高台の家」「歯止め」「犯罪の回送」「黒い空」「分離の時間」「指」「蒼い描点」「強き蟻」

## オ 負の過去抹殺型(七)

負の過去抹殺型は、負の過去を背負う主人公が、それを隠すため、犯罪に手を染めるというものである。負の過去が、必ずしも過去の犯罪の隠蔽とは限らない。負の人生というものもある。松本清張という人の人生と重ね合わせることができ、できそうである。

## ウ 政治・経済事犯型(一三)

政治・経済事犯型は、松本清張の歩んだ人生の反対側に位置している。政治・経済事犯型は、けっして豊かではない人生を歩んできた、松本清張の怒りを代弁しており、それが作品に昇華したと思われる。作品数は、一二三(一七%弱)を数える。

「顔」「共犯者」「地方紙を買う女」「ゼロの焦点」「砂の器」「薄化粧の男」「蒼ざめた礼服」

「奇妙な被告」「馬を売る女」「証言の森」「速力の告発」「寒流」「老春」「火神被殺」などのようにいづれの型にもあてはめにくいもの、「点と線」

「眼の壁」「事故」などのように複数の型にまたがるものが、いくつもあった。前者は「三點(九%)」、後者は「三六点(一六%)」を数える。特に「部分」「蒼い描点」「蒼ざめた礼服」「波の塔」は、三つの主題を共有している。松本清張の推理小説は、その内容が余りにも多岐にわたっており、かつ重厚である。都合よく類型化しようという試みは、そもそも無理を強いているのかも知れない。

ところで、「家紋」という作品には、僧侶が檀家信徒を強姦・殺害するという事件が描かれている。この作品は、あくまでも推測という体裁を整えている。石川・福井県を中心とする北陸地方において、そのような事件が実際に発生したわけではない。小説には、「事件は報恩講の終りの晩に起った。一月十六日である。報恩講は、開祖親鸞の忌日に行なう。東本願寺では十一月二十一日から二十八日までだが、西本願寺では陽曆に改めて一月九日から十六日までとしている。だから、この地方は西本願寺の系統に属していたのだ。近くには、親鸞が北陸路巡錫のとき逗留したゆかりの吉崎御坊がある。その吉崎から東北約三里にFの村があった。」(『死の枝』、七二頁)と記されている。事件は、柴山潟近辺のF村で発生した。強姦・殺人は、文言から見て、淨土真宗・西本願寺派に属していた僧侶ということになる。確かに日本海側では淨土真宗が大きな勢力をほこっており、相当数の僧侶と門徒衆が存在しているのは事実である。それでもなお、特定の宗派団体を名指しては、不適切と言うべきではないだろうか。農山村の閉鎖性と宗教がもつ内向性という傾向(あるいは属性)が、「家紋」に見られるような解決困難な事件を生むことは、十分に想像できる。この点では松本清張の指摘が間違っているわけではないが、配慮があつても良かつたのではないだろうか。

「遭難」は、遭難事件を装つて殺人を謀るという作品である。作品には、

「灌木帯の中を一時間ばかりすすむと、道は布引岳を過ぎて赤茶色をした小石の多いガレ場となつた。このあたりに来ると、不意に私の耳にサイレンの音が聞こえた。私はおどろいて足をとめた。「大町の工場のだね」(一四頁)「それは東風だったんですね。だから聞こえたのでしょう。天気が崩れる前兆だったんですね」(四九頁)』(『松本清張全集第四卷』、文藝春秋社)という台詞がある。因みに布引岳は、二、六八三mもある。大町のサイレンが聞こえるかといえば、たとえ東風が吹いても、おそらく無理であろう。だから天候の悪化を予見できそうにもない。また、東風が天候悪化をもたらすという話も事実に反するようと思われる。もしも西風ならば、そのような推測が成り立つに相違ない。松本清張は岳人・吉田一郎の教授を受けたようであるが『隨筆黒い手帖』(二二五)、少々惜しまれてならない。

## 第二章 殺人の動機に対する検討

### 一 殺害の方法と殺害の場所

#### (一) 殺害の方法

殺害の方法は、延べにして一九〇件余りにのぼる。

やはり絞殺と扼殺(縊死)が最も多くて七一件(三七%)を占める。確かに首を締めて殺したという事件は、現実の世界でよく発生している。次に殴打と撲殺が一六件(八%)余り、斬殺と刺殺二三件(七%)、薬物・服毒死一三件(七%)、墜落死一二件(七%)、溺死一二件(六%)ということになり、現実の世界を反映している。他に銃・射殺、ガス中毒死が続くことになる。【第三表】(二六頁)にあるように、餓死、食中毒(ハシリドコロ)、細菌集団感染

(テロ)死、脱血死など、多様な殺害の方法が散見される。薬物・服毒死では、

青酸カリが一般的である。不明数一四件(一三%)が全体に占める割合は大きくなないので、松本清張が殺害方法にも関心をよせていたことがわかる。なお、「砂の器」の超音波殺人は、やや現実的ではないよう気がした。

硫化水素や笑気ガスを用いた殺人も見られる。水を使って心臓麻痺を引き起こしたり(「坂道の家」)、死体を煮沸したり(「巨人の磯」)、浴槽で死体を回転させたりした事例(「梅雨と西洋風呂」)もある。また、活魚運搬用の海水タンク(生簀)で殺害に及んだ事例(「濁った陽」)は、実際にありそうな話である。これらの手の込んだやり方は、死亡推定時刻をひどく狂わせることになる。殺害の方法も時代とともに変化していく。松本清張は、時代の変化を敏感に感じ取り、先取りしていた。サリン殺人や硫化水素による自殺事件を見た時、松本清張の先見性には驚かされる。それでも、殺害の方法は殺害の場所と比べたならば、松本清張がひどく拘ってしまうような理由に乏しいと思われる。

## (二) 殺害の場所

松本清張は、明治四二(一九〇九)年に福岡県企救郡板櫃村(現在の北九州市小倉北区)で生まれ、翌年下関市へ移った。その後、小倉市へ転入した。小倉は、松本清張にとって、かけがそのない故郷(ふるさと)となつた。昭和一九(一九四四)年朝鮮に渡り、戦後帰国した。昭和二八(一九五三)年一二月は、松本清張にとって、転機の年となつた。この年から東京生活が始まり、平成四(一九九二)年亡くなるまで、清張は東京を離れることはなかつた。松本清張の父は、鳥取県日野郡矢戸村で生まれ、鳥取県西伯郡米子町へ養子入りをした。母は、広島県賀茂郡西志和村の出身である。父祖の地は山陰、母

祖の地は山陽である。

清張作品の舞台または作品と関係する地域は、東京とその隣接地域が圧倒的に多い。しかし、小倉や下関を中心とする九州地方や山陰地方もしばしば登場する。たとえば「張込み」「点と線」「共犯者」「霧の旗」「危険な斜面」「凶器」「山峡の章」「時間の習俗」「夜光の階段」「内なる線影」「梅雨と西洋風呂」「渡された場面」「屈折回路」「表象詩人」は前者の例であり、「顔」「砂の器」「田舎教師」「火神被殺」「数の風景」は後者の例である。松本清張が有名作家になる前の、原風景ともいべきこれらの土地が、彼にはひどく忘れ難いものになつていてと推察される。山口県豊浦は、松本清張が一七歳の時に訪ねた地である。父祖の地である山陰地方は、三七歳の時に訪ねている。その後、信州を旅している。信州は、作品にたびたび登場する。清張作品には、伊豆半島の温泉を始めとする日本各地の温泉が登場してくる。その理由は定かではないので、推測の域を出ないが、松本清張はもともと温泉が好きで、そのため東京に近い伊豆の温泉や日本各地の温泉を何度も訪れていたのではないだろうか。

殺害の場所は、延べ総数二二三になる。殺害の場所を地域区分した時、明瞭な傾向と偏在がみとめられる。日本列島を若狭湾・関ヶ原・伊勢湾あたりで東西に分けると、殺害の場所は東日本(一四五件、六八%)に偏っている。東日本では、東京(七一件、三三%)が群を抜いて多い。東京の地名は細部にわたつており、武藏野・武藏野台地・深大寺(七件)という地名が殺人の現場以外でも頻繁に出てくる。松本清張が東京へ転居した往時、武藏野には国木田独歩が記した、雑木の林がまだ残つていたと思われる。東京は、松本清張にとって、すでに慣れ親しんだ第二の故郷になつていていたようである。伊豆半島の地名は、一二件を数える。西日本(三〇件、一四%)では、福岡県(八件)

が例外的に多い。九州地方でも南九州は、登場しないようである。京都市や奈良市とその周辺は、殺人の場所として、馴染まなかつたようである。架空の地名は一〇件、不明は三八件(約一八%)である【第四表】(二七頁)。

殺害の場所は、首都／大都会／地方都市／農山漁村／温泉地／觀光地／山岳／山中／海岸／洞窟／峠／湖／崖／河川／渓谷／台地／墓地／操車場／埠頭／炭鉱／古墳／高速道路／樹海など、日本のほんどの地形が網羅されている。例外的であるが、離島はほとんど登場しないようである。因みに温泉と思われる地名としては、湯村温泉／有馬／作並温泉／飯坂温泉／箱根／強羅／伊豆／西伊豆／修善寺温泉／熱海／戸田／大仁／湯河原／上山温泉／樺原温泉を上げることができる。後年、松本清張は、日本国内ばかりでなく、海外にも取材の幅を広げていった。地表空間に対する関心は、最期まで衰えなかつたようである。

## 二 動機の分類・形態・構造

殺人を中心とする犯罪の動機が、作品のなかで明瞭に解説されているものばかりではない。それゆえ、読み手の受け取り方によって、若干の違いが生じることがある。「凶器」のように殺害の動機がわかりにくいものもある。動機を大まかに分類し、いくつかの形態に分けることにした。それらの動機は、或る種の構造をもつていているとみられる。動機の分類・形態・構造化の試みは、清張推理小説の解説には欠くことのできない作業である。

### (一) 松本清張が語る動機

松本清張は、推理小説家として、犯罪や殺人の動機に最も強い関心を示し

てきた人である。松本清張は、犯罪や殺人の動機について、次のように記している。

「私は今の推理小説が、あまりに動機を軽視しているのを不満に思う。それはトリックだけに重点を置いた弊だが、解決篇にちょっぴり申し訳みたいに動機らしいものをくつつけたのでは、遊びの文章というよりほかはない。動機を主張することが、そのまま人間描写に通じるようには思ふ。犯罪動機は人間がぎりぎりの状態に置かれた時の心理から発するからだ。それから、在來の動機が一律に個人的な利害関係、たとえば金銭上の争いとか、愛欲関係におかれているが、それもきわめて類型的なものばかりで、特異性がないのも不満である。私は、動機にさらに社会性が加わることを主張したい。そうなると、推理小説もずっと幅ができ、深みを加え、時には問題も提起できるのではないかろうか。」(『隨筆黒い手帖』中央公論社、一九六一)

「私は、何によらず、動機というものはすべての人間の犯す罪において、いちばん大事な点ではないかと思っています。動機のない犯罪というものはありません。そして、動機のある犯罪は、人間がもつとも窮屈の立場におかれたときの性格の現われではないかと思います。したがって、動機を追及するということは、すなわち性格を描くことであり、人間を描くことに通じるのではないかという考えをもつてているのであります。私は今まで推理小説の短篇を相当書いていますが、そのほとんどが、動機を発見することからはじまつたものであります。」(『私のものの見方考え方』大和出版、一九七八)

松本清張の推理小説には、様々なアリバイ工作、アリバイ崩し、トリックが盛り込まれているが、それよりもさらに動機の工夫に多くの紙面がさかれてきた。清張推理小説の核心は、動機であると言つても過言ではない。松本

清張の推理小説に対する研究は、要約すれば、それは動機の検討・解明ということになる。

## (二) 作品に見る動機とその分類

石川弘義「解説」(一九八二)の研究は、松本清張の推理小説に対して初めて定量的な検討を加えたという点で、注目される。石川が取上げた作品数は、五〇点である。長編(一一)・中篇(二二)・短編(三五)作品からまんべんなく選び出されたが、選出の基準は明らかではない。石川ばかりでなく、学生らも加えて、講読された。統計処理(MA法)は、主人公の属性である性別・年齢・学歴・職業、犯罪の形態と動機に対して行われた。犯罪の形態は、殺人九二%、窃盗六%、偽証六%、恐喝四%、汚職二%、詐欺二%、その他八%である。犯罪の動機からは、自己防衛三四%、復讐二八%、金銭二六%、隠蔽二四%、愛欲二〇%、嫉妬一〇%、劣等感八%、出世四%、その他一二%、という結果が得られた。推理小説における犯罪の主なるものは、殺人である。動機の大部分は、自己防衛、復讐、金銭、隠蔽、愛欲が占めていた。犯罪の動機は、社会の縮図と言える。石川は、動機にかかるこれ以上のより細かな検討をしているわけではない。

犯罪とくに殺人の動機には、作品の内容から考えてみて、個人的、家庭(家族)的な背景と社会(組織)的な背景が認められる。前者と後者は、ともに経済的、政治的、社会的、精神(愛憎、好惡)的な要因を抱えており、これらは『上位の動機』としてみることができる。『上位の動機』は、たいてい金品、不倫、痴情、貧困、学歴、職業、権力、出世、名声、名譽、価値観、権益、許認可、利潤、犯罪と関係することになる。やがて人間には怨恨(復讐、報復)、嫉妬、隠蔽、逃避、排除、補償、回復、成就、防衛、強奪などのよ

うな感情が生まれることになる。これらは、『下位の動機』としてみるとができる。人間は、上位と下位の動機に触発されて、具体的な行動(殺人、強姦、強盗、窃盗、詐欺)に走ることになる。これらを整理したのが、【第一図】(三三頁)である。しかし、動機は実は複雑に絡み合っており、必ずしも動機がひとつとは限らず、重層することがある。

## (三) 動機の形態と構造

殺人を中心とする犯罪の動機には、個人、家庭(家族)、社会という三つの大きな背景があり、その延べ総数は一五九件になる。この中で、個人的な背景が八四件(五三%)、家庭(家族)的な背景が四四件(一八%弱)、社会的な背景が三一件(二〇%弱)を数える。それら背景には、それぞれ精神的(愛情、憎悪)な要因、経済的な要因、社会的な要因、政治的な要因という『上位の動機』が関係している。個人的な背景—精神的な要因の型は四七件(三〇%)、家庭(家族)的な背景—精神的な要因の型は三六件(一三%弱)、社会的な背景—経済的な要因の型は二四件(一五%)、個人的な背景—経済的な要因の型は二二件(一四%)となっている。精神的な要因と経済的な要因が一般的であり、社会的な要因と政治的な要因はあくまでも少数である。

『下位の動機』の組み合わせ延べ総数は、一九二(不明二を含む)にもなる。その組み合わせは、おおよそ六つのタイプに大別することにした。たいていの作品はそれらのいずれかに属するが、それらのタイプに該当しない作品も少なくない。怨恨は五八件(三〇%)、隠蔽は四六件(一四%)、排除は二八件(約一五%)、成就二一件(一一%)、強奪一九件(一〇%)になり、怨恨と隠蔽が全体の五四%を占める。六つのタイプを中心にしながら、松本清張が強い関心を抱いていた動機を、形態と構造という両面から検討することにしたい。

ひとつの作品であっても、複数の殺人事件が発生し、それぞれ動機がまったく異なるというケースがある。「凶器」のように、動機の分類が困難な作品も認められる。従って、動機の分類は、筆者の主観的な印象でもって判断せざるを得なかつた。

#### ア 隠蔽—犯罪型(三五)

犯罪を隠すために新たな犯罪を犯してしまった例は、実際の社会でよくあることである。元の犯罪が大きければ大きい程、新たな犯罪を犯す確率は高まつてしまふ。このタイプは最も一般的であり、時系列という点からみても、常に起こってきたことがわかる。全体の一八%を占める。家庭ばかりではなく、社会を背景にしていることも少なくない。金銭や痴情関係ばかりでなく、社会の複雑な人間関係や貧富の差にみられるような、捻れた社会構造を反映することもある。社会的な背景—経済的な要因が五件、個人的な背景—経済的な要因が五件である。このタイプとしては、「影の地帯」「点と線」「声」「共犯者」「犯罪広告」「渡された場面」「山峡の章」「蒼ざめた礼服」の作品などを上げることができる。なかでも「点と線」は、動機ばかりでなく、アリバイ・トリックの構成という点でも、完成された作品である。

#### イ 犯恨—嫉妬型(三〇)

世の中では、男女の不倫に伴つて嫉妬心が生まれ、怨恨が殺人に繋がることが多い。その意味では、怨恨—嫉妬—不倫型と言えることができる。怨恨—嫉妬型は一般的な動機であり、時系列という点からみた時、これも常に起こっていたことがわかる。全体の約一六%を占める。家庭生活が背景となっている場合があり、たいてい家族(夫婦)関係や恋人関係は崩壊してしま

う。家庭(家族)的な背景—精神(愛情、憎悪)的な要因が一五件、個人的な背景—精神(愛情・憎悪)的な要因が一三件である。嫉妬心は、社会的な地位、高学歴、恵まれた環境、秀でた能力に対しても生まれることがある。経済・社会・政治的な動機の要因には、これらが関係している。このタイプとしては、「地方紙を買う女」「鬼畜」「天城越え」「天城越え」「表象詩人」などの作品を上げることができる。「天城越え」は既述の通り、屈折した少年の心理を描いた作品である。嫉妬心も、一様ではないことがよくわかる。

#### ウ 排除—障害型(一一)

犯罪者または犯罪を犯しかねない者が、どうしても排除したいことは、障害(邪魔者)、暴力や恐喝の恐怖、誹謗や中傷、嫌悪感である。この動機は決して少ないわけではなく、他の動機と重なることがある。全体の一%を占める。個人的な背景—精神的(愛情、憎悪)な要因が九件、家庭(家族)的な背景—精神的(愛情、憎悪)な要因が四件である。このタイプとしては、「危険な斜面」「断線」「典雅な姉弟」「渡された場面」「数の風景」などの作品を上げることができる。「渡された場面」は、隠蔽—犯罪型の動機、「坂道の家」は怨恨—仕打ち型の動機と重なる。

#### エ 犯恨—仕打ち型(一五)

怨恨—仕打ち型は、家庭生活を背景にしていることが少くないが、社会一般にも広くみられる。現代社会では、このタイプが数多く発生している可能性がある。全体の八%を占める。昨今では、セックスハラスメント、パワー・ハラスメント、アカデミックハラスメントの問題が、厳しく指摘されている。個人的な背景—精神的(愛情、憎悪)要因と家庭(家族)的な背景—精神的(愛

情、憎悪)な要因がそれぞれ四件である。このタイプとしては、「老春」「落差」「喪失の儀礼」「遠い接近」「理外の理」「蒼い描点」などの作品を上げることができる。

#### オ 成就—愛欲型(一一)

愛を成就したり、地位を手に入れようとして、人は犯罪に手を染めることがある。これは、能動的で積極的な犯罪とも言える。全体の六%弱を占める。個人的な背景—精神的(愛情、憎悪)な要因が九件を占める。古今東西を問わず、古くからあった犯罪の動機である。言うまでもなく、愛欲が成就することはない。このタイプとしては、「一年半待て」「白い闇」「誤差」「死者の網膜犯人像」などの作品を上げることができる。

#### 力 強奪—金銭型(一一)

日常生活では、金銭を奪おうとして、殺人事件に発展することがある。強奪—金銭型は一件、六%弱である。昔からあつた一般的なタイプであり、個人的または組織的な背景が、みとめられる。このタイプとしては、「張込み」「失踪」「日光中宮祠事件」「死の発送」「駅路」「鉢植えを買う女」「奇妙な被告」「駆ける男」などの作品を上げることができる。

その他、怨恨—金銭型には「偽狂人の犯罪」「馬を売る女」「告訴せず」、怨恨—犯罪型には「球形の荒野」「十万分の一の偶然」、怨恨—放蕩型には「額と歯」「小さな旅館」「恩誼の紐」など、怨恨—暴露型には「薄化粧の男」のような作品を上げができる。隠蔽—嫉妬(不倫)型には「山」「事故」など、隠蔽—出生型と隠蔽—経歴型には「ゼロの焦点」「砂の器」「指」「隠花平原」「蒼ざめた礼服」のような作品を上げることができる。「ゼロの焦点」

「砂の器」は典型的な負の過去抹殺型であるが、単純に隠蔽—犯罪型にならなかつた点で、読者を魅了してきた。防衛—恐喝型には「歪んだ複写」「三冊の同じ本」「時間の習俗」「死の発送」「蒼い描点」「蒼ざめた礼服」、他に防衛型としては「屈折回路」「球形の荒野」などを上げることができる。

除—嫌悪型には、「部分」「ベルシアの測天儀」「書道教授」を上げることができる。逃避—葛藤型には「入江の記憶」、逃避型には「山峡の湯村」「高台の家」なども上げることができる。排除—恐喝には「不安な演奏」「古本」、補償型には「紐」「留守宅の事件」を上げができる。成就—富裕型(六件、三%)には「巻頭句の女」「万葉翡翠」「連環」など、成就—地位型には「十万分の一の偶然」「夜光の階段」、成就—快感型には「熱い空気」、強奪—愛欲型には「家紋」「種族同盟」「交通事故死亡」一名、強奪—物品型には「迷走地図」、強奪—幸福型には「微笑の儀式」のような作品を上げることができる。

因みに「球形の荒野」には防衛—暴力型と怨恨—犯罪型、「歪んだ複写」には隠蔽—犯罪型と防衛—恐喝型、「時間の習俗」には防衛—恐喝型と隠蔽—犯罪型、「渡された場面」には隠蔽—犯罪型と排除—障害型、「家紋」には強奪—愛欲型と隠蔽—犯罪型、「眼の氣流」には怨恨—嫉妬型と排除—障害型、「犯罪の回送」には強奪—愛欲型と隠蔽—犯罪型、「梅雨と西洋風呂」には怨恨—仕打ち型と排除—障害型、「史疑」には強奪—物品型と怨恨—嫉妬型、「連環」には成就—富裕型と排除—障害型が含まれるように、複数の動機が重層している。このような作品は、実は四八点(三五%弱)にもなる。ひとつ的作品に描かれた複数の殺人は、それぞれ動機が異なることが少なくないものである。

松本清張の推理作品を通して、殺人にかかるあらゆる動機が網羅され

ている、と言つても過言ではない。他にも何か別の動機はないかと問われたら、答えるのに窮してしまうほど、あらゆる動機が登場してくる。しかもそれらの動機が生起した主体は、老若男女ばかりではない。幼・少年が含まれている。松本清張という人が、犯罪心理学、法医学、社会病理学、刑事訴訟法にもともと精通していたわけではない。松本清張の「動機のある犯罪

は、人間がもつとも窮屈の立場におかれたときの性格の現われではないかと思います。したがって、動機を追及するということは、すなわち性格を描くことであり、人間を描くことに通じるのではないかという考えをもっているのであります。」という言説は、ひとつひとつの作品に取り込まれ、克明に描かれている。読者は殺人そのものよりも、殺人の背景と動機に惹きつけられる。人間と社会に対する松本清張の深淵で重厚な人間力（すなわち洞察、構成、描写の力）が時代を超えて読者を魅了し、新たな読者を生むのである。動機に対する人間力の涵養源は、松本清張の歩んだ人生そのものである。

### 第三章 清張推理小説の性格

たびたび指摘してきたように、松本清張の推理小説はあまりにも広範囲でかつ重厚な内容を含んでいるので、清張推理小説の性格を規定することは決して容易なことではない。筆者がこの度再読した結果、作品の全体的な印象を通して、動機、社会、否定、予見、紀行という五つのキーワードでもって性格付けることができると考えた。これらのキーワードは、本稿の研究テーマである、動機、時空、社会性とも関係している。動機の文学、社会の文学、否定の文学、予見の文学、紀行の文学という名づけ方と性格付けは、筆者にとっては初めての試みである。しかし、評者がすでにどこかで指摘している

かも知れないが、筆者は参考にしているわけではない。松本清張の推理小説にはこれらの思想が貫かれており、推理小説の根幹をなしているように思われる。

#### 一 動機の文学

犯罪や殺人が、おそらくゴリラやチンパンジーの社会で繰り返されているわけではない、と既述した。学問研究の成果によったものではないが、筆者は我われが犯罪や殺人を犯した時が、我われがヒトになつた時ではないか、という疑いをずっともち続けてきた。犯罪や殺人の向こうには、動機がある。それゆえ、犯罪や殺人の動機を検討することは、「人間とは、何か」「人間の社会とは、一体どのようなものであるのか」という根源的な問いに応えてくれるものと思ってきた。本稿は、それらを念頭において検討を加えてきたはずである。その意味で、松本清張の文学は動機の宝庫であり、従つて動機の文学と言える。

松本清張のほとんどの推理小説には犯罪や殺人が関係し、動機がリアルに描かれている。松本清張にとって、動機の存在しないところに、犯罪や殺人は成立しないということである。すでにみてきたように動機と主題は、不可分の関係にある。動機の、排除—障害型と負の過去抹殺型、隠蔽—犯罪型／アリバイ・トリック型、怨恨—嫉妬型／怨恨—仕打ち型と人間関係重視型／心理描写洞察型には、相関関係が認められる。ひとつひとつの作品にみられたように、殺人の数だけ動機があると言える。殺人に繋がる動機は、必ずしも一様ではないだろう。殺人は、個人と組織にまたがることが少なくない。また、動機がひとつであるとは限らず、動機が重層構造になっていることも

しばしばである。作品に描かれた動機に対する検討は、社会と人間にに対する深い洞察力を養い、根源的な問いかけに対するひとつ回答を導いてくれた。

「凶器」や「張込み」は、動機という点では、例外的な作品に入るのかも知れない。

松本清張の推理小説を読むと、動機が二つの生因によって成り立っていることがわかつてくる。ひとつは、松本清張がなぜそのような小説を書くようになったのか、という内面的な動機である。これは、松本清張の生い立ちと関係が深い。松本清張が裕福な家庭に生まれ、有名大学を出て高い社会的地位に早く就いていたならば、動機の文学は生まれなかつたに違いない。もうひとつは、作品に顕在化した動機の社会的な背景や要因である。すなわち外的動機である。動機は、個人を取り巻く家庭(家族)・社会・国家となかなか切り離すことができない。精神・経済・政治的な『上位の動機』が、『下位の動機』に与えた影響はけつして小さくないだろう。作品に描かれた動機を通して、人間のこころや社会の仕組みを理解することができる。動機の文学を理解することは、人間としての生き方(または行き方)を指し示してくれる。それは、松本清張の生き方(または行き方)そのものであろう。

## 二 社会の文学

松本清張の推理小説は、評者によつてしばしば社会派推理小説と呼ばれてきた。推理小説のなかに社会的な事象を巧みに取り入れてきたからである。

松本清張が社会の出来事に敏感だったのは、なぜか。おそらく、これも彼が歩んだ人生と無関係ではないように思われる。家庭(家族)、社会、精神(愛憎、好嫌)、経済、政治という様々な問題が、推理小説のなかで取上げられ

た。

一連の腐敗・汚職事件が、〈黒い霧〉(昭和四一年一〇月)と呼ばれるようになつたが、それは「点と線」(昭和三一年一月～三三年一月)・「波の塔」(昭和三四四年五月～三五年六月)・「蒼ざめた礼服」(昭和三六年一月～三七年三月)・「中央流沙」(昭和四〇年一〇月～四一年一二月)で取上げられてきた。

砂糖の自由化と原糖の割り当てをめぐつては「ある小官僚の抹殺」(昭和三年二月)・「中央流沙」(昭和四〇年一〇月～四一年一二月)、サラリーマン金融(昭和五二年一〇月頃)と金融界の闇の問題は研究対象にはしなかつた「黒革の手帖」(昭和五三年一月～五五年二月)と「彩り河」(昭和五六六年五月～五八年三月)で取上げられ、金融界の暗部と偽善が明らかにされた。

登山ブームのきっかけを作つたのはマナスル登頂(昭和三一年五月九日)であるが、それに呼応するかのように「遭難」(昭和三三年一〇月～一二月)が書かれた。

交通事故を扱つた作品は、「事故」(昭和三七年一二月～三八年四月)・「交通事故死亡」一名(昭和四二年一月)・「速力の告発」(昭和四四年三月～五月)・「十万分の一の偶然」(昭和五五年三月～五六六年一月)の四つである。昭和三五年には交通事故が年間一万人を越え、昭和四一年にはついに〈交通戦争〉という語が生まれた。

帝銀事件(昭和二三年一月)では青酸化合物が使われたが、それに応えるかのように、「顔」(昭和三一年八月)・「ゼロの焦点」(昭和三三年三月～三五年一月)・「断線」(昭和三九年一月～三月)・「歯止め」(昭和四一年一月～二月)で青酸カリが用いられたり用いられようとした。

現金三億円強奪事件(昭和四三年一二月一〇日)に対する松本清張の考えは、明らかにされている。ただし、「小説三億円事件」(昭和五〇年一二月)は、全

集に所収されなかつた。

家庭内暴力が顕在化したのは昭和五二年一〇月以降であるが、これを扱つた作品はたぶんないと思われる。その理由は、よくわからない。松本清張は、暴力団の犯罪と暴力団という組織を直接的に扱つてこなかつた。そのことは、氣懸かりになつてゐた。松本清張にとっては暴力団の取材が困難だつたからか、それとも暴力団が日常の世界ではないと判断したからであろうか。

一方、昨今は、松本清張が推理小説のテーマにしてこなかつたような奇怪な事件が発生している。テレビや新聞では、”路上でクルマを走らせて人を轢き殺した””刃物で滅茶苦茶に人を刺した””人生がイヤになつて個室に火をつけた””ムシャクシャして犬や猫の手足を切り取つた”、というニュースが流れる。また、明らかな精神異常者や精神障害者による犯罪も、顕在化している。松本清張は、これらの人物を殺人者としてほとんど登場させてこなかつた。まず当時の時代背景が考えられるが、推理小説としては面白みに欠けるからであろうか。暴力が常態化した世界や社会と個人との距離が遠くなつた事件は、松本清張の関心を惹かない事象なのかも知れない。

社会と人間との関係は、推理小説に登場する殺人者または主人公を捉えて、過去・現在・未来という時間軸、都市・農山漁村などの空間軸、経済・非経済と出自・学歴という関係軸、社会と人間との包含・接近・離隔という距離軸、これらの関係性のなかでキーワードを再度構成・検討し、いくつかのタイプに類型化できるのかも知れない。今後の研究課題であると思われる。

### 三 否定の文学

松本清張の推理小説には、ほとんど例外なく否定的な要素が含まれている。

推理小説に登場する主人公または殺人者たちは、自分の過去を否定する、あるいは自分を否定せざるを得なくなつてしまふ。

負の過去抹殺型や隠蔽—犯罪・出生型の作品は、その典型的な例である。

「顔」「共犯者」「ゼロの焦点」「砂の器」「薄化粧の男」「地方紙を買う女」には自己の否定的側面、「紐」「鬼畜」「階」「部分」「典雅な姉弟」「確証」「駅路」「疑惑」「白い闇」「一年半待て」「潜在光景」「入江の記憶」「花実の男」「犯罪広告」「新開地の事件」「火と汐」「恩讐の紐」「留守宅の事件」「天下ない森」「聞かなかつた場所」「強き蟻」「火神被殺」「留守宅の事件」「天下の同じ本」には家族・家庭の否定的側面、「ある小官僚の抹殺」「わるいやつら」「眼の壁」「彩り河」「彩霧」「中央流沙」「重葉脈」「迷走地図」「けものみち」「喪失の儀礼」「影の地帯」「歪んだ複写」「蒼ざめた礼服」「不安な演奏」「草の陰刻」「屈折回路」「数の風景」には社会の否定的側面が、それぞれ描かれている。

これは、松本清張の生き立ち、家族や社会の関係に対する彼の否定的な思い、彼の人生観が反映されている、とみなすこともできる。自己の否定は、家庭(家族)の否定と社会の否定へと広がつて行くことになる。それは、政治家、医者、弁護士、高級官僚、宗教家、実業家という、高学歴で高い社会的な地位に登りつめた人々に対する否定として顯れる。それらの語頭には、悪徳ということばが付される。推理小説からは、明快で肯定的、樂觀的、希望的な地平は一向にみえてこない。否定の思想は、主人公や殺人者の言動のなかに描かれている。松本清張は人生の成功者であるが、彼が自分をそのように評価していたかどうかわからない。作品が否定の闇を照らすことによつて、読者も同意するのである。多くの人々は、長い人生のなかで後悔を積み重ねてきたに違ひない。努力の甲斐がなく、敗北を余儀なくされた人もいるだろ

う。それゆえ、松本清張の推理小説は、人口に膾炙してきたのではないだろうか。筆者はこれを否定の文学と呼ぶが、それはただの自己否定ではない。人々に共感を呼ぶ、否定の文学である。

#### 四 予見の文学

松本清張の作品には、時代を先取りした作品が少なくない。そのような作品は、政治・経済・医療・宗教の世界に限なくおよんでいる。

「ある小官僚の抹殺」(昭和三十三年一月)では中間管理職の苦悩と死、「天城越え」(昭和三四年一一月)・「潜在光景」(昭和三六年四月)・「恩讐の紐」(昭和四七年三月)では幼・少年による殺意と殺人、「内なる線影」(昭和四六年九月)では硫化水素殺人、

「速力の告発」(昭和四四年三月~五月)ではトリカブト殺人、

「坂道の家」(昭和三四年一月~四月)・「濁った陽」(昭和三五年一月~四月)では風呂やタンクで水や海水を利用した巧妙な殺人、

「駆ける男」(昭和四八年一月)ではハシリドコロ殺人、

「一年半待て」(昭和三二年四月)・「紐」(昭和三四年六月~八月)では保険金・囑託殺人、

「微笑の儀式」(昭和四二年四月~六月)では笑気ガス殺人、

「屈折回路」(昭和三八年三月~四〇年一月)では細菌散布大量殺人、「わるいやつら」(昭和三五年一月~三六年六月)では医療過誤と偽装殺人を取上げている。

因みに保険金殺人は昭和四九年一月に起こっており、トリカブト殺人が起こったのは昭和六一年五月、それが明るみになつたのは平成三年六月のことである。

とである。まるで予見されていたかのように、オウム真理教団によるサリン散布大量殺人は、平成六年六月に起こった。

一連の政治腐敗・汚職事件が「黒い霧」と呼ばれたのは、昭和四一年一〇月のことである。「点と線」は汚職事件を背景にしており、連載が始まったのは昭和三二年二月のことである。田中金権政治は昭和四九年一〇月、ロッキード事件は昭和五一年二月に起こっている。松本清張は、まるでこれらを見越していたかのようである。松本清張が「疑惑」を発表したのは、昭和五七年二月である。意味あいは少々違うが、「疑惑」という語がブームになったのは、昭和六〇年のことである。チフス・赤痢菌の人体実験事件が千葉大学において起こったのは、昭和四一年四月である。それらに先立つて、「わるいやつら」は昭和三五年一月~三六年六月、「屈折回路」は昭和三八年三月~四〇年二月に発表された。〈蒸発〉という現象が社会問題化したのは昭和四二年のことであり、蒸発・不明者は八六、一二五四人を数えた。いわゆる蒸発と同じ現象であったわけではないが、失踪事件はすでに「失踪」(昭和三四年四月~六月)・「駅路」(昭和三五年八月)において取上げられていた。松本清張には、近くこのような事件が起こるに違いないという時代の予感・不安や確かな見通しがあったのであろうか。

本稿では研究の対象にしなかつたが、「神の里事件」(昭和四六年八月)は宗教の属性ともいえるマインド・コントロールの恐ろしさと宗教団体が内包する攻撃性と危険性を暗示している。かつてオウム真理教(平成一年八月~五月認可)が、凄惨で残忍な集団殺戮事件(平成一年一月以降)を繰り返すということがあった。松本清張は、宗教が抱える理不尽な仕組みと屈折した動機を危惧していたのだと思う。

## 五 紀行の文学

松本清張の代表作のひとつである「点と線」は、はじめ『旅』(昭和三二年二月～三三年一月)という旅の雑誌に連載されたものであった。日本経済の高度成長と新幹線の開通を始めとする交通システムの整備は、旅行ブームに火をつけた。その兆しは、すでに「点と線」に準備されていた。その後、松本清張は、日本の名勝旧跡ばかりでなく、当時はあまり知られていなかつた地方にも光をあてた。既述したように、作品には、日本全国の温泉地がしばしば登場する。読者にとっては、温泉地が身近なものに感じられるようになつた。“作品の舞台となつた場所へぜひ行ってみたい”という衝動に駆られた読者も少なくないだろう。

「点と線」の香椎海岸、「眼の壁」(昭和三二年四月～一二月)の木曽路、「白い闇」(昭和三二年八月)の十和田湖、「ゼロの焦点」(昭和三三年三月～三五年一月)の能登金剛(ヤセの断崖)と羽咋市、「蒼い描点」(昭和三三年七月～三四年八月)の秋田県五城目や濃尾平野、「遭難」(昭和三三年一〇月～一二月)の鹿島槍ヶ岳、「影の地帯」(昭和三四四年五月～三五年六月)・「波の塔」(昭和三四四年五月～三五年六月)の中部山岳地帯と断層湖、「天城越え」(昭和三四四年一月～三六年四月)の亀高駅・出雲地方・東京駅、「時間の習俗」(昭和三六年五月～三七年一月)の和布刈神社、「Dの複合」(昭和四〇年一〇月～四三年三月)の奥丹後地方など、枚挙にいとまがない。これらの作品を読んでいると、まるで旅行をしているような気分にさせられる。時刻表を駆使したやり方は圧巻であり、松本清張以降、推理小説界では時刻表の活用が定番になった。

「ゼロの焦点」の舞台となつた、能登半島と能登金剛には、一大観光ブー

ムが到来した。それは、今日評判になっている、日曜日のNHK大河ドラマに先立つ現象であった。ただし少々困ったことも起こっているようである。能登金剛のヤセの断崖では、昭和四五～四八年にかけて自殺者が殺到した。筆者の取材によれば、或る年の自殺者が一八人を数えた。そのすべてが女性であった、といわれる。松本清張は、まこと旅の名人であると思う。旧国鉄のキャンペーン「ディスカバー・ジャパン」(昭和四八年)の陰の立役者は、実は松本清張ではなかつただろうか。清張の推理小説は、旅の水先案内人を勤めていたようである。

### 結びにかえて

筆者は、松本清張の推理小説に対する研究対象を一定の基準でもつて選別し、研究対象となつた作品の主題をアリバイ・トリック型、人間関係重視型、心理描写洞察型、政治・経済事犯型、負の過去抹殺型に大別しながら、若干の検討を加えた。また、殺害の方法と殺害の場所についても、社会の動きや松本清張の生い立ちと住まいという点から、検討した。主として殺人を扱つた作品にかかる犯罪の動機とその分類、動機の形態と構造から、作品を隠蔽―犯罪型、怨恨―嫉妬型、排除―障害型、怨恨―仕打ち型、成就―愛欲型、強奪―金銭型に大別しながら、他のタイプも加えてそれぞれ検討してきた。清張推理小説に対する検討は、つまるところ動機の解明にあつた。最後に清張の全体像を動機の文学、社会の文学、否定の文学、予見の文学、紀行の文学というキーワードでもつて捉え、その性格付けを試みた。動機と社会性については、ある程度まで検討することができたが、時系列でもつて動機の変容を解明することは困難であった。また、空間的な検討についても不

十分さを残してしまった。

昨今、殺人の動機が殺人者にとつても曖昧不確かであり、殺人の動機がどんどん内向きになつてきている。社会と人間との関係は、ひどくぼやけ、接点が見つからない程である。〈殺人を犯すほどのことではない〉〈恨みや利害関係も存在しない〉という、従来では想像できないようなことで殺人事件が起きていた。"べつに相手は誰でもよかつた"という犯人のコトバは、清張推理小説の世界をぶち壊しかねない。社会と人間との関係を凝視し続けてきた松本清張が、このような事件に遭遇した時、精神病理学者のような発言をするとは思われないが、推理小説の題材としてはずいぶん馴染みにいくだろうと思う。

今年は、松本清張の生誕百年にあたる。筆者が、青年期に人生の生き方と行き方の多くを学んだのは、松本清張の社会派推理小説と昭和史を中心とするノンフィクションであった。若くして松本清張を読むと、心醉・耽溺の世界に迷い込んで、ついには周りが見えなくなってしまう。筆者の青年期は、松本清張依存症にひどく陥った青年期であったとも言える。初老期を迎えて、再び松本清張の作品と会う機会に恵まれた。はじめて頭を冷やして、静かに清張作品を読むことができた。

筆者は、もともと純文学と大衆文学に分けるというやり方に違和感を感じている。そもそもそのように分ける基準が、明確ではない。松本清張の推理小説は、純文学的な(といわれる)作品と大衆文学的な(といわれる)作品から成り立っている。その両方を含む作品も少なくない。ひとつのジャンルに縛るのは、およそ無理であろう。清張推理小説の幅をひどく狭めてしまうことになりかねない。

松本清張の作品群を山々に例えれば、八、〇〇〇メートル級の高峰が林座

するヒマラヤ山脈、と評することができよう。世界には、文豪と呼ばれる人達がいる。筆者には、松本清張こそ世界の文豪のひとりにふさわしい人物であると思ってならない。たとえ最頂のきわみという誇りを受けても、私は松本清張を推したい。人生の短期間に、これほどの幅広い、奥行きの深い作品を数多く残した作家は、はたして他にいるだろうか。松本清張こそ、日本が世界に誇ることのできる、不世出の文学者であると言いたい。

#### 【参考文献】

- 文藝春秋『松本清張全集第一巻』～『松本清張全集第六六巻』  
松本清張『隨筆黒い手帖』(中央公論社、一九六一)  
松本清張『駅路』(文藝春秋新社、一九六一)  
松本清張『山峠の章』(光文社、一九六五)  
松本清張『蒼い描点』(新潮社、一九七一)  
松本清張『蒼ざめた礼服』(新潮社、一九七三)  
文藝春秋「著書目録」(『松本清張全集第三八巻』所収、一九七四)  
文藝春秋「年譜」(『松本清張全集第三八巻』所収、一九七四)  
松本清張『死の枝』(新潮社、一九七四)  
松本清張『眼の氣流』(新潮社、一九七六)  
松本清張『私のものの見方考え方』(大和出版、一九七八)  
石川弘義「解説」(『松本清張全集第三九巻』所収、文藝春秋、一九八二)  
松本清張『死の発送』(角川書店、一九八二)  
松本清張『松本清張傑作総集I』(新潮社、一九九三)  
松本清張『犯罪の回送』(角川書店、一九九三)  
岩見幸恵著、文献目録・諸資料等研究会編『松本清張書誌研究文献目録』

(勉誠出版、二〇〇四)

神田文人・小林英夫編『戦後史年表一九四五～一〇〇五』(小学館、二〇〇五)

佐々木毅・鶴見俊輔・富永健一・中村政則・正村公宏・村上陽一郎編  
『戦後史大事典一九四五～一〇〇四増補新版』(三省堂、二〇〇五)

志村有広・歴史と文学の会共編『松本清張事典』(勉誠出版、二〇〇八)

第一表 研究の対象となった推理小説とその概要

時期	番号	作品名	アリバイ	トリック	動機	殺害の場所	発売時期/和暦
I	1	張込み	※		P, e, s-m	東京目黒（舞台は九州S市）	30.12.
	2	顔			P, m, r-j	島根県、殺人未遂	31.8.
	3	声		○	S, e, c-c	不明、武蔵野	31.10.~11.
	4	共犯者			P, e, c-c	強盗傷害、小倉（未遂）	31.11.
	5	点と線	○	○	S, e, c-c	福岡県香椎海岸	32.2.~33.1.
	6	地方紙を買う女			P, m, g-j	甲信地方K市臨雲峠(F)	32.4.
	7	鬼畜			F, m, g-j	東京、(未遂、伊豆の海岸)	32.4.
	8	眼の壁	○	○	S, e, c-c	新宿、中央アーバス、中央アーバス	32.4.~12.
	9	一年半待て			P, m, a-i	不明	32.4.
	10	白い闇			P, m, a-i	十和田湖、奥入瀬川	32.8.
	11	カルネアデスの舟板	※		P, m, c-c	不明	32.8.
	12	捜査格外の条件		○	F, m, g-j	東京阿佐ヶ谷	32.8.
	13	二階	※		F, m, a-ig-j	不明（自殺）	33.1.
	14	ある小官僚の抹殺			S, e, c-c	熱海の旅館	33.2.
	15	ゼロの焦点			P, s, c-re	能登金剛、鶴来町、東京	33.3.~35.1.
	16	日光中宮祠事件			P, e, s-m	日光市	33.4.
	17	額と歯			F, m, g-d	戦前の東京	33.5.
	18	巻頭句の女			P, e, a-w	不明	33.7.
	19	蒼い描点			F, m, g-t, P , e, d-t	神奈川県仙石原、真鶴町	33.7.~34.8.
	20	遭難		○	F, m, g-j	鹿島槍ヶ岳	33.10.~12.
	21	証言	※	○	(P, m, c-j)	向島（偽証）	33.12.
	22	黒い血の女			F, e, a-wr-j	戦前の和歌山県海草郡	34.10.
	23	坂道の家			F, m, g-tr-j	東京赤坂	34.1.~4.
	24	危険な斜面			P, e, r-j	山口県豊浦山林	34.2.
	25	失踪			S, e, s-m	武蔵小金井	34.4.~6.
	26	影の地帯			S, e, c-c	東京、天童川、国立、柏原	34.5.~35.6.
	27	波の塔	※		S, s, g-j	富士の樹海（自殺）	34.5.~35.6.
	28	歪んだ複写			S, s, c-cd-t	東京阿佐ヶ谷	34.6.~35.12.
	29	紐			F, e, c-m	多摩川（嘱託殺）	34.6.~8.
	30	霧の旗			F, m, g-t	東京（九州K市、冤罪報復）	34.7.~35.3.
	31	寒流	※		P, m, g-j	不明（左遷に報復）	34.9.~11.
	32	天城越え		○	P, m, g-j	天城峠	34.11.
	33	高校殺人事件			F, e, c-c	武蔵野台地	34.11.~35.3.
	34	黒い福音			S, e, c-c	武蔵野台地	34.11.~35.6.
	35	凶器			P, ?	九州の黒岩村(F)	34.12.
	36	球形の荒野			F, p, d-vg-c	世田谷、不明	35.1.~36.12.
	37	濁った陽			S, e, c-c	不明→真鶴	35.1.~4.
	38	わるいやつら	○	○	P, e, a-wc-c	不明、(殺人未遂)	35.1.~36.6.
	39	草			S, e, c-c	茨城、東京、山梨	35.4.~6.
	40	砂の器			P, s, c-b	蒲田操車場、不明	35.5.~36.4.
	41	山峡の章	○		P, e, c-c	作並温泉	35.6.~36.12.
	42	部分			F, m, r-d	不明	35.7.
	43	駅路			F, e, s-m	長野県	35.8.
	44	誤差			P, m, a-i	温泉	35.10.
	45	確証			F, m, g-j	東京	36.1.
	46	連環			P, e, a-wr-j	不明、南房総鋸山	36.1.~37.10.
	47	蒼ざめた礼服			S, e, c-b, S , e, c-d, S, e, c-c, S, e, c-c, S, e, c -c	東京湾、千葉県袖ヶ浦、東京 都、【推定】横浜沖、横浜沖	36.1.~37.3.

時期	番号	作品名	アリバイ	トリック	動 機	殺害の場所	発売時期/和暦
	48	万葉翡翠		○	P, e ,a-w	姫川上流	36.2.
	49	薄化粧の男			F,m,g-e	東京都練馬区	36.3.
	50	不安な演奏			S, p,c-cr-t	柏崎沖、尾鷲、東京	36.3.~12.
	51	死の発送		○	P, e,s-m, P ,s,d-t	福島県飯坂温泉、栃木県小山市	36.4.~8.
	52	潜在光景			F,m,g-j	東京、(殺人未遂)	36.4.
	53	時間の習俗		○	P, e,d-tc-c	相模湖、水城	36.5.~37.11.
	54	典雅な姉弟		○	F,m,r,jg-j	東京麻布	36.5.
	55	田舎教師		○	F,m,g-?	出雲地方葛城村(F)【推定】	36.6.
	56	鉢植えを買う女		○	P, e,s-m	不明	36.7.
	57	小さな旅館		○	F,m,g-d	東京都江古田	36.9.
	58	老春			S, s,g-t	東京	36.11.
	59	落差	※		P,m,g-t	高知県川上市(F) (傷害)	36.11.~37.11.
	60	ガラスの城		○	P,m,g-jr-j	修善寺温泉、深大寺	37.1.~38.6.
	61	けものみち			P, e,r-j, P ,m,r-d, S ,e,c-c(重複)	不明、神奈川県山林、浦賀、 不明、不明、不明	37.1.~38.12.
	62	眼の気流		○	P,m,g-jr-j	品川区戸越 【推定】	37.3.
	63	花実のない森			F, s,c-j/b	箱根山中、強羅、一碧湖(F) ?	37.9.~38.8.
	64	事故		○	P,m,c-j	山梨巨摩郡、山梨千代田湖	37.12.~38.4.
	65	彩霧			S, e,c-c	清水港、逗子	38.1.~12.
	66	絢爛たる流離			P,m,g-t, P ,m,f-j, P,?	不明、不明、不明	38.1.~12.
	67	屈折回路			P,m,d-v, S ,e,a-w	不明(事故死、集団殺人実 験／三池炭鉱・北海道・千葉 県蟹崎【推定】)	38.3.~40.2.
	68	熱い空氣		○	P,m,a-p	不明、(愉快犯)	38.4.~7.
	69	たづたづし			P,m,r-j	長野県、(殺人未遂)	38.5.
	70	断線			P,m,r-j	青山墓地、江ノ島	39.1.~3.
	71	寝敷き		○	P,m,r-j	湯河原	39.3.~4.
	72	草の陰刻			S,p,c-c	不明、松山	39.5.~40.5.
	73	地の骨			S,e,c-c	東京	39.11.~41.6.
	74	中央流沙			S,e,c-c	作並温泉	40.10.~41.11.
	75	Dの複合		○	S,e,c-c, P ,e,c-c, P ,m,a-i,g-c	紀淡海峡、熱海、戸田大仁、 東京	40.10.~43.3.
III	76	二重葉脈			S,e,s-m, S ,e,g-m	岡山県久米郡、古市古墳、 金剛山、青梅	41.3.~42.4.
	77	歯止め		○	F,m,g-j	不明、(戦前)	42.1.~2.
	78	隠花平原			F,m,c-b	東京、熱海 (10人殺害)	42.1.~43.3.
	79	種族同盟			P,m,s-i	東京	42.3.
	80	交通事故死亡1名		○	P,m,s-i	東京郊外、(殺人帮助)	42.2.~12.
	81	偽狂人の犯罪		○	P,e,g-m	東京	42.2.~12.
	82	家紋		○	P,m,s-ic-c	北陸地方のF村	42.2.~12.
	83	史疑			P,s,s-rg-j	越前地方の山村	42.2.~12.
	84	年下の男		○	P,m,g-d	高尾山	42.2.~12.
	85	古本		○	P,e,r-t	不明	42.2.~12.
	86	ペルシアの測天儀		○	P,m,r-d	不明	42.2.~12.
	87	入江の記憶			F,m,f-di	瀬戸内の田野浦 【推定】	42.2.~12.
	88	土偶		○	P,m,a-ic-c	東北の山林	42.2.~12.
	89	犯罪広告		○	F,r?,m,c-c	和歌山県の海辺	42.3.~4.
	90	微笑の儀式		○	P,m,g-js-h	厚木	42.4.~6.
	91	二つの声	○	○	P,m,g-jr-j	東京	42.7.~10.
	92	証言の森	※		P,m,s-i	東京、(戦前)	42.8.

時期	番号	作品名	アリバイ	トリック	動 機	殺害の場所	発売時期/和暦
IV	93	火と汐	※	○	P,m,g-j	東京目黒	42.11.
	94	弱気の虫		○	P,m,g-j	東京市ヶ谷	42.11.~43.2.
	95	内海の輪		○	F,m,g-jr-j	有馬の蓬莱峠	43.2.~10.
	96	山		○	P,m,c-j	長野県上山温泉（事故死）	43.7.
	97	新開地の事件		○	F,m,g-dg-j	武蔵野	44.2.
	98	喪失の儀礼		○	P,s,g-t	名古屋、深大寺、不明	44.1.~12.
	99	指		○	P,m,c-re	東京	44.2.
	100	死んだ馬		○	P,m,a-i/su	東京	44.3.
	101	速力の告発		○	P,s,g-t	東京	44.3.
	102	夜光の階段		○	P,s,a-st/i	福岡県筑紫野、青梅、信濃町	44.5.~45.9.
	103	分離の時間		○	P,m,r/g-j	不明、横浜	44.5.~9.
	104	証明		○	P,m,g-j	東京	44.9.
	105	書道教授		○	? , P,m,r-d	東京下町→相模湖、東京下町	44.12.~45.3
	106	強き蟻		○	P,m,g-t	不明→熱海の旅館	45.1.~46.3.
	107	梅雨と西洋風呂		○	P,s,g-tr-j	水尾市(F)	45.7.~12.
	108	火神被殺		○	F,m,g-t	鳥取県湯村温泉	45.9.
	109	奇妙な被告	※	○	P,s,s-m	東京西郊外	45.10.
	110	巨人の磯		○	F,m,g-j	茨城県五浦海岸	45.10.
	111	聞かなかった場所		○	F,m,g-j	長野県	45.12.~46.4.
	112	水の肌	※	○	F,m,f-j/d	石川県	46.1.
	113	二冊の同じ本		○	F,m,d-tg-t	不明、(毒殺未遂)	46.1.
	114	葡萄唐草模様の刺繡		○	P,?	不明	46.1.
	115	留守宅の事件		○	F,e,c-m	名取市	46.5.
	116	生けるパスカル		○	F,m,g-tf-r	不明	46.5.~7.
	117	遠い接近		○	S,p/s,g-t	鈴鹿山脈、不明	46.8.~47.4.
	118	内なる線影		○	F,m,r-j/d	福岡県垣津村(F)	46.9.
	119	礼遇の資格		○	F,m,g-j	東京都	47.2.
	120	恩誼の紐		○	F,m,g-df-r	中国地方、青梅	47.3.
	121	山の骨		○	F,m,r-tc-c	不明、多摩市	47.5.~7.
	122	表象詩人		○	F,m,g-j	小倉【推定】	47.7.~11.
	123	理外の理		○	P,m,g-t	不明、(業務上致死か殺人)	47.9.
	124	高台の家		○	F,m,f-di/d	東京	47.11.~12.
	125	駆ける男		○	P,e,s-m	瀬戸内の旅館	48.1.
	126	告訴せず		○	P,e,g-m	荒川	48.1.~11.
	127	東経 139 度線		○	P,m,g-j	群馬県富岡市	48.2.
	128	山峡の湯村		○	P,m,f-da-i	飛騨小坂樺原温泉、殺人未遂	50.2.
	129	渡された場面		○	P,e,c-c,P ,m,c-c,r-j	芝田市(F)、坊城町(F)	51.1.~7.
	130	渦	※	○	P,m,g-j	武蔵野、西伊豆	51.3~52.1.
	131	馬を売る女		○	P,e,g-m	首都高速道路→相模湖	52.1.~4.
	132	十万分の一の偶然		○	P,s,a-st, F,m,g-c	東名高速道路、大井埠頭、千葉県鹿野山	55.3.~56.2.
	133	彩り河	※	○	S,e,c-c	有楽町の映画館、山梨県塩山市、国分寺のアパート、北陸のT市（殺人未遂）	56.5.~58.3.
	134	疑惑		○	F,m,g-ja-i	東京	57.2.
	135	迷走地図		○	S,p/e,s-r	山陰地方	57.2.~58.5.
	136	数の風景	※	○	P,m,r-j,S ,e,c-c	不明、不明	61.3.~62.3.
	137	黒い空		○	P,e,s-m,P ,s,r-j	東京	61.8.~62.3.
	138	死者の網膜犯人像		○	P,m,a-i	北海道北浦市(F)、様似、北浦市(F)	2.5.
	139	犯罪の回送		○	F,m,s-i,F ,e,s-m,P, ,s,c-c		4.9.

動機の分類と記号の意味は、第1図による。殺害場所が架空の地である時は、(F)印を付した。○印はアリバイやトリック（技巧）がみとめられることを、※印は殺人が主題ではないことを示す。

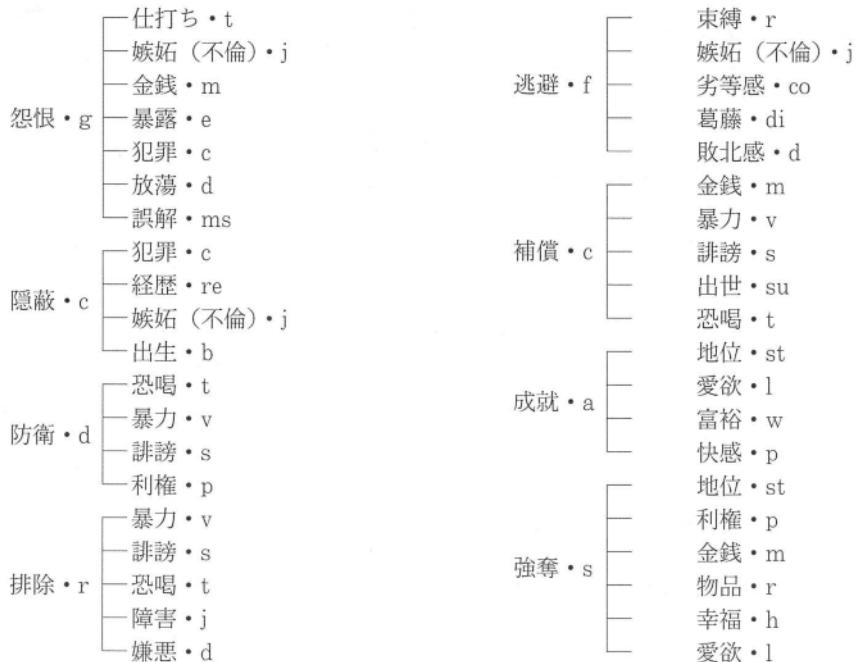
### 【大分類／背景】

- 社会的・S
- 家庭（家族）的・F
- 個人的・P

### 【中分類／要因／上位の動機】

- 経済的・e
- 精神的・m
- 社会的・s
- 政治的・p

### 【小分類／要因／下位の動機】



第1図 殺人を主とする動機とその形態・構造

松本清張の推理小説を参考にしながら分類してみたが、心理学の研究成果に基づき分類をしたわけではない。

第二表 研究の対象となった推理小説とその主題

番号	作品名	主題	番号	作品名	主題
1	張込み	日常と非日常の克明な描写	54	典雅な姉弟	近親の歪んだ性関係と破綻
2	顔	殺人の隠蔽と綻びの面白さ	55	田舎教師	事故を偽装した殺人事件推理
3	声	巧みなトリックと特異な能力	56	鉢植えを買う女	奇妙な完全犯罪の破綻
4	共犯者	殺人の隠蔽と綻びの面白さ	57	小さな旅館	歪曲を余儀なくされた家族愛
5	点と線	アリバイト崩しとトリックの面白さ	58	老春	労働争議と立身出世の分岐点
6	地方紙を買う女	殺人隠蔽と綻びの面白さ	59	落差	屈辱を元凶とする女の怨恨
7	鬼畜	特異な女性の醜悪な生き方	60	ガラスの城	愛憎に満ちた人間模様の展開
8	眼の壁	トリックアートバイを鍔めた面白さ	61	けものみち	社会悪のピボット的構造の解剖
9	一年半待て	一事不再理の原則と意味	62	眼の気流	孤独感にみる不倫への怒り
10	白い闇	男のエゴイズムの破綻	63	花実のない森	古い家族観と物語のミステリー性
11	カルネアデスの舟板	自己保身の為の緊急避難	64	事故	手の込んだ不倫暴露の手口
12	捜査圈外の条件	殺人の隠蔽と綻びの面白さ	65	彩霧	金融界を巡る闇の世界
13	二階	女性（妻）の心情・心理	66	絢爛たる流離	家族・個人に関する一断面
14	ある小官僚の抹殺	小官僚の悲哀と社会悪	67	屈折回路	細菌集団感染と実験の恐怖
15	ゼロの焦点	過去抹殺の苦悩と動機の闇	68	熱い空氣	日常世界に見る愉快犯の罠
16	日光中宮祠事件	初動調査の稚拙さと慢心	69	たづたづし	人生の悲哀と結果の驚嘆
17	額と歯	刑事の洞察力と殺人の発覚	70	断線	男に巢食うエゴイズムの破綻
18	巻頭句の女	手の込んだ保険金詐取事件	71	寝敷き	巧妙なトリックと殺人発覚の妙
19	蒼い描点	謎解きと心理描写の面白さ	72	草の陰刻	政治と暴力の癒着と捜査ミス
20	遭難	手の込んだ殺人誘発事件	73	地の骨	大学の虚像と権威の失墜
21	証言	不倫と自己防衛のジレンマ	74	中央流沙	官僚・財界の汚職と悪の連鎖
22	黒い血の女	特異な女性の醜悪な生き方	75	Dの複合	民俗世界に見る怨念・遺恨
23	坂道の家	巧妙な殺人と男女の愛憎	76	二重葉脈	企業倒産に纏わるエゴと怨恨
24	危険な斜面	殺人の隠蔽と綻びの面白さ	77	歯止め	歪んだ母子関係と巧みなトリック
25	失踪	供述・アリバイト・判決の不確実	78	隠花平原	宗教世界の閉鎖性とその暗部
26	影の地帯	社会悪に見る巧妙なトリック	79	種族同盟	一事不再理の原則とその矛盾
27	波の塔	日本の風景美と男女の悲哀	80	交通事故死亡1名	交通事故と殺人帮助の境界線
28	歪んだ複写	不信と憎悪に満ちた社会悪	81	偽狂人の犯罪	心神耗弱の罠とその看破力
29	紐	囁き殺人の信憑性と夫的心情	82	家紋	農山村と宗教世界の閉鎖性
30	霧の旗	冤罪事件に対する不条理	83	史疑	研究者の歪んだ体質と欺瞞
31	寒流	私憤の稚拙なはけ口と失敗	84	年下の男	自然科学の知恵と殺人の発覚
32	天城越え	少年に隠された性と嫉妬心	85	古本	盗作が齎す殺意の陥落と後悔
33	高校殺人事件	戦時物資の隠匿とその闇	86	ペルシアの測天儀	悪がもたらす殺人発覚の妙
34	黒い福音	宗教の閉鎖性とその暗部	87	入江の記憶	家庭の中の不貞とその回想
35	凶器	特異な凶器と結末の面白さ	88	土偶	日常から齎された殺人の発覚
36	球形の荒野	戦争処理を巡る対立の評価	89	犯罪広告	自然科学の知識と殺人の発覚
37	濁った陽	殺人の隠蔽と綻びの面白さ	90	微笑の儀式	笑気がス自杀を偽装した事件
38	わるいやつら	死亡診断書の危うさと不信	91	二つの声	巧みなアリバイト工作を企てた事件
39	草	特異な病院の事情と腐敗	92	証言の森	出兵逃れのための自首・自白
40	砂の器	過去抹殺の苦悩と動機の闇	93	火と汐	アリバイト工作とアリバイト崩しの面白さ
41	山峡の章	麻薬に絡む官吏の欲と女心	94	弱気の虫	賭博に陥った弱い人間の姿
42	部分	人間の思い込みと錯覚の怪	95	内海の輪	秘密保持が齎す殺人の発覚
43	駅路	サリーマンの閉塞感と解放感	96	山	不倫と自己防衛のジレンマ
44	誤差	死亡推定時刻の不確実性	97	新開地の事件	家庭内の不貞と家族の崩壊
45	確証	夫婦間の危うさに潜む不倫	98	喪失の儀礼	医療界の闇と医師の腐敗
46	連環	女の悲哀と巧みなトリックの妙	99	指	レズの世界と殺人の時空
47	蒼ざめた礼服	戦後政治の闇と利権の暗躍	100	死んだ馬	専門的な知識と殺人の発覚
48	万葉翡翠	醜い欲／エゴ／巧妙なトリック	101	速力の告発	交通事故とトリカブト殺人
49	薄化粧の男	殺人の隠蔽と発覚の面白さ	102	夜光の階段	男の野望とエゴイズムの極
50	不安な演奏	選挙違反事件の一例	103	分離の時間	ホモの世界と殺人の時空
51	死の発送	死体発送に絡むトリックの面白さ	104	証明	男女・夫婦痴情のもつれ
52	潜在光景	少年に隠された性と嫉妬心	105	書道教授	犯罪要素の複合と犯罪発覚
53	時間の習俗	アリバイト工作とアリバイト崩しの面白さ	106	強き蟻	背信に塗れる悪女の女性観

番号	作品名	主　題	番号	作品名	主　題
107	梅雨と西洋風呂	巧みなトリックと殺人の暴露	124	高台の家	夫婦間の暗部と絶望感の果て
108	火神被殺	近親相姦の兄に対する怨恨	125	驅ける男	専門的な知識と殺人の発覚
109	奇妙な被告	被告の変転する自白の真偽	126	告訴せず	悪が悪を裁けない矛盾のわけ
110	巨人の磯	巧みなアリババ工作・崩しの妙	127	東経 139 度線	妻の不倫に対する怨恨と手口
111	聞かなかった場所	トリックとストーリーの面白い展開	128	山峡の湯村	境遇の異なる人々の人間ドラマ
112	水の肌	男を襲う人生の挫折と敗北	129	渡された場面	捜査の稚拙さと原稿の盗用
113	二冊の同じ本	家庭内の不和と愛憎・殺人	130	渦	視聴率の疑念と死後経過時間
114	葡萄唐草模様の刺繍	矛盾で暴かれた殺人の発覚	131	馬を売る女	都会の闇ビジネスに踊る人々
115	留守宅の事件	手の込んだ保険金詐取事件	132	十万分の一の偶然	巧妙心とトリックが招く殺人事件
116	生けるパスカル	自然科学の智と殺人の発覚	133	彩り河	小市民の復讐・変貌と金融界
117	遠い接近	社会的な不条理と謎解き	134	疑惑	歪んだマスコミ報道のあり方
118	内なる線影	女の醜いエゴと巧妙な殺人	135	迷走地図	隠匿物資と政界・財界の闇
119	礼遇の資格	専門的な知識と殺人の発覚	136	数の風景	経済的補償と利権に伴う利害
120	恩誼の紐	屈折した人間の行動と殺意	137	黒い空	現代の利益追求と歴史の因縁
121	山の骨	世間体と家庭の名誉の守護	138	死者の網膜犯人像	ホルマリン注射と網膜残像の
122	表象詩人	男女・友人・夫婦関係の縋れ			関係と真意
123	理外の理	業務上致死と殺人の境界線	139	犯罪の回送	政治・金銭・不倫に潜む殺意

第三表 研究対象の推理小説に見る殺害の方法

殺害の方法	延べ件数	割 合	殺害の方法	延べ件数	割 合
絞殺、扼殺、縊死	71	37.27	脱血死	3	1.57
殴打・撲殺死	16	8.39	細菌感染死	3	1.57
斬殺、刺殺	13	6.82	交通事故死	2	1.04
薬物・服毒死	13	6.82	餓死	2	1.04
墜落死	13	6.82	食中毒死	2	1.04
溺死	11	5.77	轢死	1	0.52
銃・射殺	4	2.09	劇薬飛散（硫酸）	0.5	0.26
ガス中毒死	4	2.09	その他（電気等）	5	2.62
焼死	3	1.57	不明	24	12.59

複数の方法で殺害された時は、それぞれを 0.5 としてカウントした。

第四表 研究対象の推理小説に見る殺害の場所

地名	件数	地名	件数	地名	件数	地名	件数
東京（郊外、下町 、湾を含む）	32	東京都青山墓地	1	東京都蒲田操車場	1	東京都市ヶ谷	1
東京都武蔵野台地 ・武藏野	5	青梅	3	世田谷	1	信濃町	1
目黒	2	高尾山	1	多摩川	1	練馬区	1
向島	1	厚木	1	多摩市	1	荒川	1
新宿	1	赤坂	1	麻布	1	大井埠頭	1
阿佐ヶ谷	2	国立	1	国分寺	1	有楽町	1
		京橋	1	江古田	1	首都高速道路	1
		品川区戸越	1	深大寺	2	武蔵小金井	1

西 日 本			東 日 本（東京を除く）				
福岡県小倉	(2)	岡山県久米郡	1	北海道	1	神奈川県横浜沖	2
香椎海岸	1	高知県川上市	(1)	北浦市	2	箱根	1
水城	1	四国芝田市	1	様似	1	浦賀	1
筑紫野	1	愛媛県松山	1	青森県十和田湖	1	強羅	1
三池炭鉱	1	兵庫県有馬蓬萊峠	1	奥入瀬川	1	逗子	1
垣津村	1	和歌山県の海辺	1	東北の山林	1	仙石原	1
坊城町	1	海草郡	1	宮城県名取市	1	静岡県天城峠	2
九州・黒岩村	1	紀淡海峡	1	作並温泉	2	伊豆・西伊豆	2
九州・水尾市	1	奈良県吉市古墳	1	福島県飯坂温泉	1	修善寺温泉	1
山口県豊浦	1	大阪府金剛山	1	茨城	2	熱海	3
島根県	1	三重県鈴鹿山脈	1	茨城県五浦海岸	1	戸田	1
出雲地方葛城村	1	尾鷲	1	栃木県日光市	1	大仁	1
鳥取県湯村温泉	1			栃木県小山市	1	湯河原	2
中国地方	1			新潟県柏崎沖	1	東名高速道路	1
山陰地方	1			群馬県富岡市	1	清水港	1
広島県の田野浦	1			千葉県鹿野山	1	長野県（信州）	3
瀬戸内	1			南房総鋸山	1	姫川上流	1
				蟹崎	1	上山温泉	1
				袖ヶ浦	1	飛驒小坂樺	1
				山梨	1	原温泉	
				山梨県巨摩郡	1	中央アルプス	2
				千代田湖	1	天竜川	1
				塩山市	1	鹿島槍ヶ岳	1
				甲信地方K市	1	愛知県名古屋	1
				臨雲峠		北陸地方の農山村	1
				埼玉県柏原	1	石川県	1
				神奈川県横浜	1	石川県の農山村	1
				山林	1	能登金剛	1
				相模湖	2	鶴来町	1
				一碧湖	1	北陸のT市	1
				江ノ島	1		
				真鶴町	1	富士樹海	1

殺害場所不明は38を数える。（ ）は未遂を示す。福岡県坊城町・垣津村、九州の黒岩村・水尾市、出雲地方の葛城村、高知県川上市、四国の芝田市、北海道北浦市、甲信地方K市臨雲峠、神奈川県一碧湖は、おそらく架空の地名であると思われる。

平成二十三年一月三十一日発行

第十回松本清張研究奨励事業研究報告書

編集・発行 北九州市立松本清張記念館

北九州市小倉北区城内二番三号

電話 ○九三一五八二一一二七六一

印刷・製本  
(有)プラネット印刷

# 松本清張研究奨励事業

第14回

## 募集要項

### 一、趣旨

時代を見つめ続けた松本清張の文学を研究することは、今後の時代の進むべき方向性と私たちの生きていく指針を見出すことにもつながります。このような視点から、清張の作品や人物像についての研究活動を推進し、歴史や社会の事象の深層を追求する精神を継承していくため、松本清張夫人ナヲ様のご厚意により創設しました。

### 二、対象

ジャンルを問わず、松本清張の作品や人物像を研究する活動や、松本清張の精神を継承する創造的かつ斬新な活動（調査、研究等）で、これから行おうとするもの。年齢、性別、国籍は問いません。ただし、未発表に限ります。個人または団体も可。

### 三、内容

入選者（団体）に二〇〇万円を上限とする研究奨励金を支給します。金額は企画内容を検討して決定します。

### 四、応募規定

今後取り組みたい調査・研究テーマ等の内容が具体的にわかる企画書、予算書、参考資料など（様式は自由、ただし日本語）を、平成二十四年三月三十一日までに応募してください。

### 五、選考

松本清張記念館内の選考委員会により選考します。

### 六、発表

審査終了後、審査結果を直接通知します（六月末頃）。なお、入選者には開館記念日（八月四日）に、北九州市で贈呈式を行います。

### 七、その他

採用された企画は翌年の六月末日までに実施成果を報告していただきます。また、成果品である研究論文、報告書等は記念館が刊行予定の研究誌に掲載することができます。成果品にかかる著作権等諸権利は、北九州市に帰属します。

### 八、応募先

〒八〇三一〇八一三 北九州市小倉北区城内二番三号  
TEL〇九三（五八一）二七六一 FAX〇九三（五六一）一一〇三